

VI 調査の成果と課題

1 遺構について

(1) 住居について

野田生4遺跡は、標高20~40mの海岸段丘上に立地し、遺跡の西端と中央には2本の無名の沢が流れ、調査区の北側で合流し内浦湾に注ぐ。遺構は沢の開析によってできた断崖の縁辺から南側の緩やかな傾斜地にかけて構築されていたようである。確認された遺構は住居跡2軒、土坑13基、焼土1基で、その多くがC地区の70~76ラインの間にまとまって分布していた。遺構の構築時期が判断できたものは、全て縄文時代中期中葉、サイベ沢VII式~見晴町式に属する。他の時期不明遺構の多くも、立地関係から同時期の所産であることが考えられる。

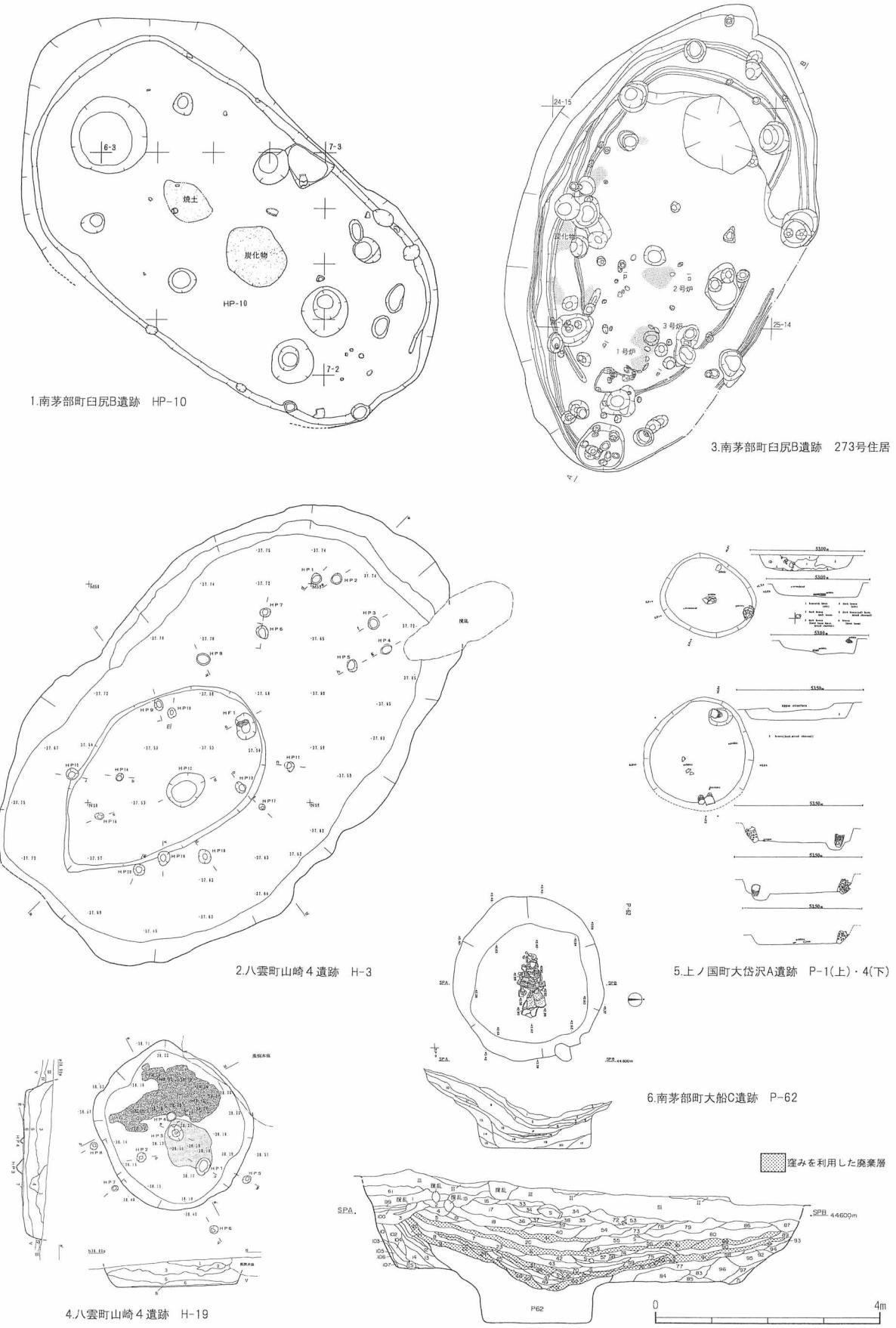
住居は長楕円形(H-1)と卵形(H-2)を呈し、両者とも6mを超える比較的大型のものである。H-1は6ないし8本の主柱穴を有するとみられ、支柱穴と考えられる浅い小ピットが、床面の住居長軸上と壁面に確認された。炉は地床炉で、住居の中央付近にみられた。また、壁は構築面付近で緩やかに傾斜する特徴があった。H-1は調査区の北側まで広がるため完掘していないが、8~10mほどの規模であることが予想される。H-1と同様の規模で、床面の柱穴構造が類似するものは、南茅部町臼尻B遺跡(南茅部町教育委員会1979)や八雲町山崎4遺跡(北埋調報162)のサイベ沢VII式期住居などにみられ、典型的住居形態と捉えられる。しかし、壁面形状や壁面ピットが存在しない点、H-1とは異なり、こうした構造に関しては住居廃絶後の改築の可能性がある。H-2は上述のように卵形で確認され、4基の主柱穴を住居の四隅に設置し、その内側には長軸に並行する4基1組の支柱穴列を2組配列したとみられる。柱穴は全て深さ10~20cm前後の浅いものであった。床面は低いベンチ構造を有し、地床炉が住居長軸上に3基構築されていた。また、P-12が住居の付属施設と考えられ、その配置から先端ピットを有した可能性が指摘される。柱穴、炉は基本的にシンメトリーな配置が看取できる。卵形で先端ピットを有す住居は、南茅部町臼尻B遺跡(南茅部町教育委員会1979・1985・1986)、大船C遺跡(同1996)でみられるように、ノダップII式、大安在B式期など中期後葉に属するもので、中央ピットの存在や埋甕炉・大型の石組み炉が主体になるなど、時期的、構造的差異がある。権現台場遺跡(函館市教育委員会1990)後駒B遺跡(南茅部町教育委員会1985)、臼尻B遺跡、山崎4遺跡などにみられるサイベ沢VII・見晴町式期の住居には、長楕円形状で6m前後のものが散見され、浅いベンチ状構造、地床炉などH-2と共通項が多い。H-2は住居構造的にはやはりサイベ沢VII式期の住居に属し、本来的には長楕円形を呈した可能性もある。H-1・2は短期間で埋め戻され、覆土中からの土坑構築や焚き火をしている。円筒土器文化から中期中葉では廃絶後の住居の凹みを利用して有機物や土器などが多量に廃棄(送り)されることが知られている。また臼尻B遺跡のサイベ沢VII式期の住居には廃屋墓(HP-10 Pit-1)などもみられるが、これは上屋構造が存在した時点での利用である。野田生4遺跡の住居にみられた住居廃棄後の利用行為には、墓壙の副葬品で出土する一括個体土器や礫・石皿などが土坑(HP-5)に伴う点注目され、墓、送りなどの行為が推測される。今後同様の出土例に対する墓壙の認定には、リン・脂肪酸分析やフローテーション作業などによる微細自然遺物の抽出などの分析が必要であり、個人的にも活用を心がけたい。

(2) 土坑について

土坑には竪穴状遺構が2基、墓と考えられるものが2基含まれる。

竪穴状遺構はP-2・3で、規模は3~4m、サイベ沢VII式・見晴町式期に多くみられる小形円形住居に類似し、時期、性格ともに、これに類すると考えられる。P-2は床面中央部に楕円形ピット

1 遺構について



図VI-1 繩文時代中期の住居と墓壙

を有し、ピット覆土には有機物の腐植層が含まれる。住居覆土との切り合い関係から、住居使用時に構築された付属施設とみられる。こうした構造をもつ住居は新道4遺跡D H-12(円筒土器下層C式)などがみられるが、時期も異なり性格は不明である。P-3はやや小形の竪穴状遺構だが、八雲町山崎4遺跡H-19や上ノ国町大岱沢遺跡P-1・4(見晴町式期)に類例がみられる。山崎4遺跡H-19では住居の外周に支柱穴があり、本遺跡のP-3にも同様な構造が存在した可能性がある。大岱沢遺跡P-4では、ピット廃絶後の窪みを利用した作業施設が確認され、H-1、H-2の状況と類似している。P-2・3とも小ピットを伴うことから、一本柱の主柱構造が考えられる。

墓壙と考えられるのはP-4・6である。楕円・不整円形で、規模は約2.5mである。断面形状は坑底から垂直に立ち上がり、坑口付近で広がる。P-6の覆土はローム主体土で坑底が厚く覆われた後、暗褐色土と黄褐色土の薄い互層が堆積し、覆土中位には器形復元可能な土器が5個体ほど埋設されていた。覆土は人為的堆積によるものと判断した。P-6に類似した形態で壙底からロームが厚く堆積するものは大船C遺跡P-62に類例がある。P-62は住居廃絶後の窪みを利用した廃屋墓である。10歳前後の男子の歯が土壙中位の副葬土器と伴出し、土器はほぼ完形のものが6個体と多出している。遺体の上部は暗褐色から黒褐色土で覆われるが、その上部にも窪みを利用して形成された廃棄層が薄い互層で存在する。P-6上部覆土の互層もこうした窪み利用の廃棄行為が考えられよう。P-62は榎林式期の新段階に属し、P-6とは時期差があるが、円筒土器文化から廃屋の窪地利用は一般化していることからも妥当性はあるだろう。また、覆土下位のローム主体土の厚い堆積については、函館市権現台遺跡の中期前葉～中葉の土壙(II-10・25・30号)に類例がある。P-4の堆積状況は坑底から黄褐色、暗褐色の土層が堆積し、その上位に黒色腐植土層と、褐色土に包含された一括個体土器が出土している。上述のように大船C遺跡P-62では、覆土中位に一括個体土器と遺体層が確認され、P-4もこれに類する葬法がおこなわれた可能性がある。また、P-4は、完形に近い土器が3個体出土し、なかでも無文土器(図III-17-76)が注目される。内外面に煤などの付着物はなく使用痕跡は薄い。同時期の無文の深鉢は、野田生2遺跡に出土例がみられるだけで、これも墓壙からの出土である(北埋調報167)。出土状況や希少性から考えても一般的用途とは区別された可能性がある。無文土器については今後とも類例を探し、献供品としての性格を検討していきたい。

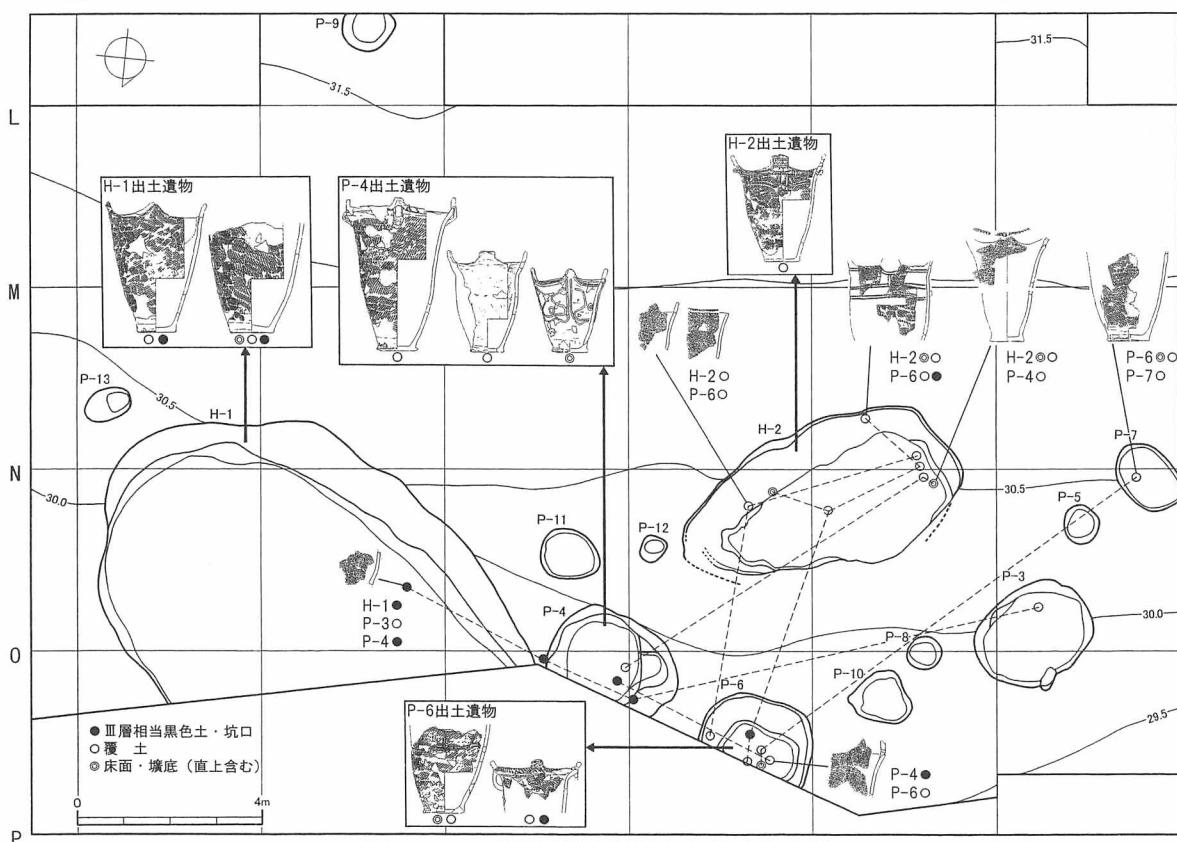
(3) 遺構の新旧関係と出土土器について

野田生4遺跡では、掘上げ土等の残存が皆無で、層位的な遺構の新旧関係を把握することは困難であった。しかし、土器の個体分類・接合作業の結果、遺構間をまたぐ接合例が幾つか確認できた。遺構間は近接する場合と、10mほどの距離を隔てるものがあり、人為的な要素により各遺構に分布した可能性もある。遺物自体がどのような経緯で各遺構内に残されたかを出土層位から考察し、これを材料として各遺構の新旧関係の検討をおこなった。ただし、包含層の削平により、遺物の由来が遺構周辺に散布していたものであるかの確認ができなかた点、本考察には限界性がある。

図VI-1は遺構間個体分類・接合状況を示したものである。遺構間で関係がみられるのはH-1・H-2・P-3・P-4・P-6・P-7で、H-2・P-4・P-6、P-6・P-7の関係が比較的密接であると看取される。H-2は床面出土遺物がP-4覆土(中部2・3層)、P-6覆土(2層)・黒色土と接合している。P-4・6とも出土層位は、短期間で埋め戻されたと考えられる覆土で、土坑構築時に遺構内に遺棄されたとみられる。P-4とP-6はH-2の形成以前、もしくは使用期間内に構築された可能性がある。P-4とP-6の関係は、P-6の覆土(2層)とP-4坑口上部層(Ⅲ層相当)が接合することから、P-6構築時にP-4は自然堆積が始まっていたと捉えられる。P-6とP-7の関係はP-6の床・覆土(中位2層)とP-7の覆土(1層)が同一個体視

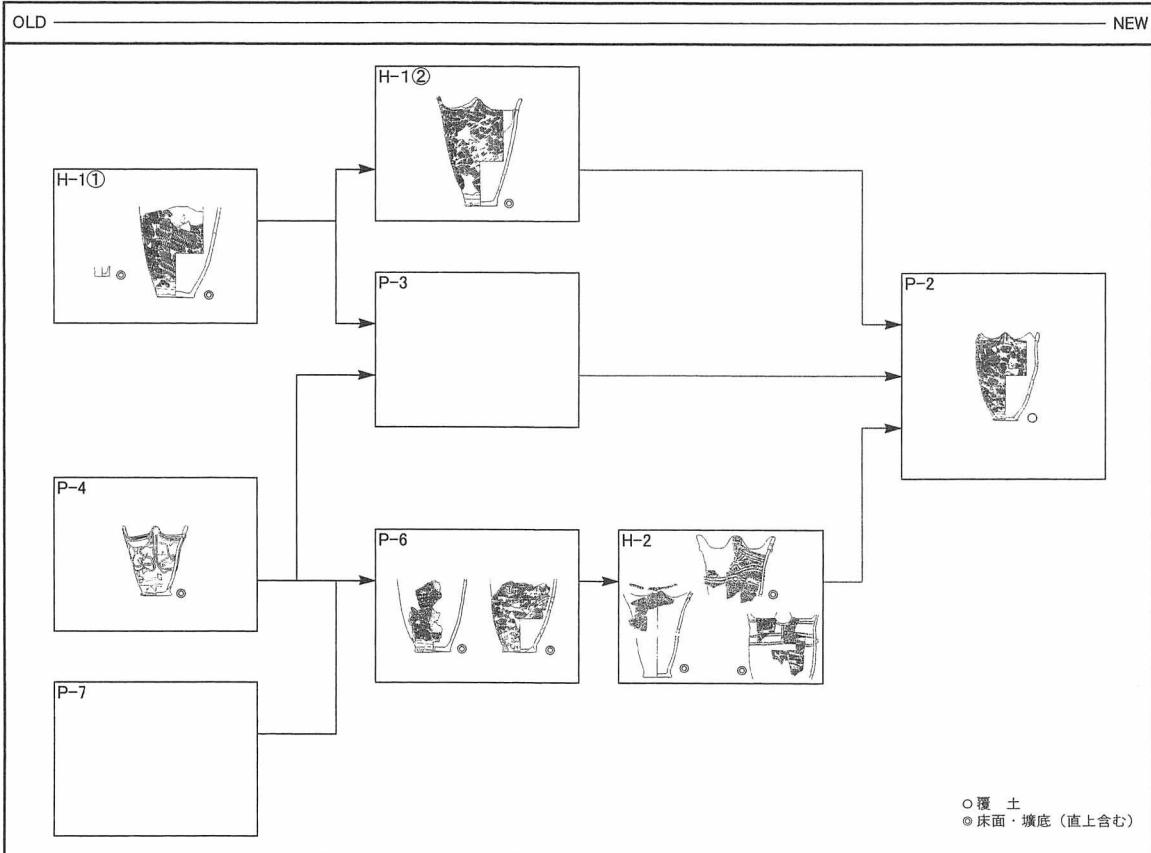
1 遺構について

70



75

図VI-2 遺構間接合状況と主な出土土器



図VI-3 遺構の新旧関係と出土土器

されることから、P-6 覆土の堆積以前、P-7 の堆積がある程度進行した後に、両遺構に遺物が遺棄されたと捉えた。両者の時期は近接したものとみられる。H-1 は P-3・4 と接合関係を持つ。三者の関係は、H-1・P-4 Ⅲ層相当層と P-3 覆土（2 層）が接合し、P-2 の 2 層が床から薄い腐植土層を挟んでおこなわれた埋め戻しの堆積と考えられることから、P-3 廃絶後間もない埋め戻し時期には H-1・P-4 はすでに覆土が堆積し、上部の自然堆積が始まっていたと捉えられる。以上考察結果をまとめたものが図 VI-2 である。尚、H-1①は床面から覆土硬化面以前、H-1②は覆土中に形成された硬化面の生活痕跡を示している。各遺構の新旧関係は矢印によって表現した。複数の遺構が連続的に矢印で結ばれる場合、その遺構間は新旧関係を持つが、直接矢印で結び付けられないものは並行関係となる。また、各遺構の枠内には床面出土の主な土器を図示した（P-2 を除く）。H-1①出土の土器は羽状縄文と斜縄文が並存するが、地文のみの施文が主体である。H-1②以降も施文の特徴は変わらないが、やや斜縄文が多く、突起は山形となる。両者とも見晴町式期とみられる。P-6 の土器は口縁部を欠損するので特徴が不明瞭である。地文は羽状と斜縄文がある。P-6 より新しく位置付けられた H-2 の土器は台形のやや大型の突起や胴部上半の沈線文、ボタン状貼付文、ドーナツ形貼り付け文、口唇の刻みなどサイベ沢Ⅶ式と捉えられ、H-1 は H-2 に比べ新しいと考えられる。P-2 の土器は覆土出土であり、直接的に遺構の新旧関係を問うことはできないが、土器自体は胴部の膨らみが強く、突起が 3 単位となることから、見晴町式の末期に位置付けられる可能性がある。P-2 は 80 ライン以西に単独で存在するため、76 ライン以東にまとまる遺構群との関係は薄いと考えられる。H-1①・②、H-2、P-2、P-6 から抽出した試料の、放射性炭素年代は、 $4470 \text{ y. B. } P \pm 40 \sim 4530 \text{ y. B. } P \pm 40$ の間にまとまって測定された。これらの遺構が縄文時代中期中葉に属し、ほぼ同時期に並存・建て替えられたことが考えられる。今後、放射性炭素年代測定の結果や土器型式を細く観察することにより、野田生 1・2 遺跡、山越 3・4 遺跡の中期遺構とどのように関係するかを検討していく必要があるだろう。

2 スクレイパーの形態と機能について

スクレイパーの観察時、刃部の周縁や裏面に光沢を有す資料が多くみられた。その数量と比率は、スクレイパーに類すると観察された両面調整石器を含めれば 55 点中 37 点、67% を占める（以下、観察対象として両面調整石器の一部を加えることとする）。野田生 4 遺跡と同時期、縄文時代中期中葉の遺構・遺物が多数出土した八雲町山崎 4 遺跡、同山越 2 遺跡でも、多数のスクレイパーの刃部縁辺に光沢が観察され、報告者は使用痕の可能性を指摘している。

本節では、こうした表面痕跡の実態を捉えるため、第 1 にスクレイパーの形態の観察、第 2 に光沢の分布状態の観察、第 3 に金属顕微鏡による観察をおこない、形態と機能に関しての若干の考察をおこないたい。尚、包含層出土資料の時期は不確定だが、分布状況から中期中葉主体と捉え扱うこととする。光沢の観察される資料については図 VI-4・5 に抽出し、光沢部位をスクリーントーンで表現した。光沢が明るいものとやや鈍いものではトーンの種類を変えている。

(1)-A スクレイパー技術形態学的観察

本遺跡では、スクレイパーを形式設定して扱ったが、R フレイクとの区分が曖昧であること、素材形態・刃部加工が多様であることなど、スクレイパーは技術形態学的定義の不確定な石器である。スクレイパーの実態を明らかにするために、①平面形態、②素材、③刃部（加工の部位・形態・状況）に関して分類し、観察をおこなう。

① 石器平面形態